

第一話 街へ

平成 25 年 6 月 20 日(木)

幻想譚工房

ザッ、ザッ、ザッ

雪の残る地面を踏みしめて歩いていく。でこぼこして歩きにくい道を進むたびに、腰までかかる銀色の髪が左右に揺れる。

くねくねと曲がりくねった道を、私は鼻唄を歌いながら歩いていた。

辺りには背の低い草木が多く、太陽の光は地面まで届く。地面には日の光を浴びた植物が顔をだし、春の到来を告げている。

背中にかごを背負って、丈夫な革の靴が地面を鳴らす。雪の森を歩くのにスカートはちょっと不似合いだけど、これは昔からなので気にしない。

どこからどう見ても森に山菜を採りに来た一人の少女。でもひとつだけ違うことがある。

しばらく歩くと道の終点にたどり着いた。そこだけは開けているような場所になっていて、背の低い草だけが繁っている。

終点というだけあって、そこから先に道はない。切り立った崖があるのみだ。雪で真っ白な山々の稜線が切れ目なく連なり私のいる場所を山々が取り囲んでいるような風景。お日様がゆっくりとその稜線へのしかかり、空を赤く染めている。

崖の下をのぞきこむと、遥か下に雪解け水を運ぶ川が見えた。

川は遠くに見える山に向かって伸びていて、その先がどうなっているのか私は知らない。

少しだけ背中が寒くなって、私は近くにあった木にすがり付いた。あまりの高さにちょっとだけ怖くなったのだ。

そう。ここは、誰もいない遠い高い山の中。そこに私とおと一さんの二人で暮らしている。

木につかまりながら、崖から目を背けてゆっくり立ち上がると、もと来た道を歩き出す。そろそろ家に帰らないと、真っ暗な山道を歩くのは命に関わるくらい危ないのだ。

薄いページュ色の髪と白っぽい肌。腰にはタクトくらいの大きさの小さな魔術用の杖。私はディスパテルと呼ばれる種族だ。

大気中から魔力を取り込み、体内の魔術回路で形質を変化させ、魔術として放出する事ができる種族。本にはそう難しく書いてあるけど、簡単な言葉で言えば魔法使いだ。

体は弱いけど、魔術と呼ばれる能力を使うことができる種族がディスパテル。反対に魔術は使えないけど力が強くて頑丈なのがミネルヴァ。この世界には二つの種族が暮らしている。

見た目は一緒なのに、体格や髪の色が違ったり、魔術が使えたり使えなかったり。色んな違いがあるみたい。

「ただいまー」

家に帰ると、おとーさんはいつものように椅子に座って本に文字を書いていた。

おとーさんは山に来るまでは研究者として魔術の研究をしていたらしい。

魔術とは、ディスパテルが生き残るために手にいれた能力で、大気中や体内の魔力を色々な形質に変える事ができるものだ。

火や水を作り出すのはもちろん、傷を癒したり身を守ったり、なかには環境を変えることができるものもある。

おとーさんの本棚にはそんな魔術についてかかれた本がいっぱいあって、私は小さい時からその本を読んで暮らしてきた。

書いてある意味が分からない本もまだまだたくさんあるけど、もっと勉強すれば分かるようになるのかな。

「お帰り、カレン」

そう言うとおとーさんは席を立て、小さく伸びをした。

「今からご飯作るね」

私は背負ってた籠を手を抱えて、台所に向かった。油を入れたお鍋を火にかけて、床下から小麦粉を取り出す。

今日はちょっと頑張ってフキノトウの天ぷらだ。

高い山に住んでるけど、生活で困ったことはほとんどない。この辺りだけはおとーさんの魔術で地上と同じような暖かさになってるし、必要な物はおとーさんが六巡に一回街まで買いにいってくれる。

「巡（めぐり）」というのはディスパテルのカレンダーの特徴で「赤の日、青の日、黒の日」の三日をひとつの曜日として数えている。曜日も全部で九つと多いため、ディスパテルのカレンダーでは一週間は二十七日になる。そのため、この三日を「巡」という小さな単位として数えているのだ。

二巡なら六日、六巡なら十八日だ。

話は戻って、六巡ごとに街に行くおとーさんが、最初はうらやましかった。

そんな私におとーさんは「大きくなれば街に連れていく」と言ったけど、結局一度も連れていってもらえないままもう何年も経っている。

自分で歩いて山を降りようとしても、おとーさんが張った結界を越えるとそこはもう厳しい環境の山脈で、とても進めそうな環境じゃない。

今ではもう街に行けなくてもいいと思ってるけど、もう私は今年で十六歳にな

る。昔に比べて大きくなった私は、いつか山を降りる日が来るんだろうか
きれいに揚がったフキノトウが浮き上がってきた。私はそれを注意深くお皿に
移すと、居間に持っていった。

山の上で暮らす一日は決まりきった習慣を繰り返す日々だ。午前中はちいさな
畑の手入れをしたあとで、街で暮らす人たちの生活や文化、歴史なんかについ
て勉強をする。お昼ご飯を食べたあと、魔術の勉強をする。魔術の仕組みや使
い方、実際に魔術を使ってみたり。夕方頃に畑や辺りの野草を摘んで夕食を作
る。夕食後にはもう一度、今度は魔術のもっと専門的な、理論や体系なんかを
勉強する。

夕食が終わって後片付けが済んだあと、今日もそのつもりで魔術の本を用意し
ていると、突然おと一さんが言った。

「そろそろ山を降りてみないか？」

「えっ？」

いま、山を降りるって言った？

「それは……街に行けるってこと？」

「そうだ」

恐る恐る聞くと、おと一さんははっきり頷いた。いつか来るとは思っていたけ
ど、こんなに突然になるとは思わなかった。

「どうして突然行っても良いことになったの？」

あんなにダメだって言ってたのに、それにそんな大事なことをごはんを終えた
タイミングで言うなんて。

「……まあ、お前も今年で十六だ。ずっと山にいるわけにもいかないだろうし、
街に出て良い頃だと思ったんだ」

そういうと、おと一さんは湯飲みのお茶を飲んだ。

行けなくて良いと思ってたけど、行けるんだったらやっぱり街には行ってみたい。
い。

「いつ行くの？」

おと一さんはつい三日前に買い物を済ませたばかりだった。次の買い出しまで
はあと5巡も先だ。

「カレンさえ良ければ明日にでも行ってもらいたいが、荷造りがあるだろうから
明後日になるかな」

「そんなにすぐ？ それに荷造りって」

「ああ、実はな……」

詳しく話を聞いてみると、三日前海に行ったときに研究所の人に戻ってくるよ
うに言われたらしい。なんの研究をするのかは分からないけど、長いこと家に

帰ることができなくなってしまうので、私をゼキルさんという名前の伯父さんの所で預かってもらうことにしたそうだった。

伯父さんはおかあさんのお兄さんで、街で色んな人をまとめる偉い人らしい。会ったことはないけれど、おと一さんの親友で私の事も知っているみたいだ。それでも、知らない街に一人で行ってそこで暮らさなきゃいけないなんてっ。街へ行ける日がようやく来たというのに、たちまち不安が心を埋め尽くすようだった。

街に行くことが決まって二日。とうとう私が山を降りるときがきた。

「ポータルを使えば樹海の中に出られる。そこから道なりに歩けば 1 時間くらいでシェダルという街にたどり着けるよ」

「わかったわ」

私たちが住むことができるよう環境を変えている保護結界を出て数分歩くと魔方陣があった。ここと複数の場所を繋いでいるみたいで、おと一さんはポータル同士を繋ぎ合わせるための呪文を唱えていた。

いつもこの魔方陣を使って街まで買い出しにいったみたいだ。

保護結界の外は高い山で、一年中雪が溶けないくらい寒い。冬用のコートを着込んでもまだずっと寒くて体が小さく震えている。

「よし、できたぞ」

魔方陣が活性化し、地面にかかれた方陣が黄色い光を発し始めた。

「シェダルについたらゼキルっていう男を訪ねるんだ。この地図の建物にいるはずだ」

おと一さんからもらった二枚の地図には、街までいく道のりの地図と、街の中が詳しく書かれた地図だった。それぞれ街と街の中のひとつの建物に赤い丸が描いてある。それを確認してすぐに地図をポケットにしまった。

「ゼキルさんね」

「終わったらすぐ迎えに行くからな、それまで元気にやってくれ」

「大げさだよ、おと一さん」

おと一さんが言うには、呼び出された用事がいつ終わるかわからないらしい。一ヶ月か、二ヶ月か。もしかしたらずっと来ないかもしれない……。

「それじゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

おと一さんと挨拶をして、魔方陣のなかに踏み込んだ。

そして次の瞬間、私は森の中に立っていた。

光の中を歩いたり、飛んだり。そんな事は全く無くて、唐突に景色ががらりと変わった。

私は辺りを見回した。辺りは背の高い木々がうっそうと生い茂っている。木々の隙間から見える空は狭く、日差しが地面まで届くことは滅多になさそうだ。辺りは薄い霧が張っていて、鳥のさえざりだけが森の中から聞こえてくる。人どころか動くものも見つからない。果たしてこんなところに街なんかあるんだろうか……。

魔方陣は雨や風で削れないように切り株の上に彫るようにして描かれていた。今は非活性状態になっていて、この状態ではどこにも行くことはできない。活性化のコードは書いた本人しか分からないので、おと一さんがいなければポータルを開くことはできない。

おと一さんの用事が終わるまで、家には帰れないんだ……。

森のなかは湿気が多くてじめじめしている。私はコートを脱ぐと、カバンのなかに詰め込んだ。

「さあ、街に行こう」

おと一さんからもらった地図を開くと、線のようなものに沿って歩けば街までたどり着けるようだった。

線……。この線は一体なんだろう。道かしら。

もう一度辺りを見回してみた。線のようなものは見当たらない。

「おと一さんから地図の読み方も教わるべきだったわ」

とはいえここに立ってても始まらない。

「とりあえず空が広い場所に出なきゃ」

私が住んでいたのは高い山なのだ、その方角が見えたなら、山と反対の方向に歩けばいいはず。

切り株を中心に一周ぐるりと回りを見渡すと、木の少なそうな方に向かって歩き出した。

歩き出して十分が経った。

一向に広い空が見えてくる気配はない。どこまでも続く同じような風景を見ているうちに、だんだん自分がどこにいて、どこへ向かっているのか分からなくなってくる。

「はあ、こんな調子で街にたどり着けるのかしら……」

ため息をついた時、背後の草がガサッと音を立てた。

「何？」

振り返っても何も無い。風が草を揺らしたのだろうか。

「気のせいかな？」

前に向き直って再び歩き出す。するともう一度背後で音が鳴った。今度はさっきよりも大きな音だ。

私はもう一度振り返った。すると、十メートルくらい離れた草むらに動物がいた。

毛並みは濃い藍色、四本足で立って漆黒の目は私をギロリと捉えている。

狼だ。以前おと一さんの部屋にある図鑑で見たことがあったけど、実際の狼を見るのは初めてだった。

狼は動こうとはしなかったが、ガルルと唸り声をあげてこっちをにらんでいる。本で読んだ知識だけど、狼は人を襲う事もあったっけ……？

そこまで考えて背筋が冷たくなった。もしかしてあの狼は私を狙ってる？

「落ち着いてカレン、落ち着くのよ」

そう自分に言い聞かせるも、体は逆に石のように固まって動けない。

狼はしばらく様子をうかがたあと、突然こちらに向かって走り出してきた。一瞬で私との距離が詰まっていく。

「きゃあっ」

反射的に両腕で顔の辺りを覆うと、目の前に光の障壁ができた。狼は壁にぶつかって、そのまま地面に倒れ込む。倒れ込んだ狼は起き上がろうともがいていた。

「わあああ」

唐突に意識が現実引き戻されて、私は後ろに向かって走り出した。

全身が熱くなり、頭が危険だと叫んでる。私は木々の合間を縫って、とにかく走った。

けれど、背後で私のあとを追いかけてくるように草の音が鳴っている。

「誰か、誰か助けて！」

頭が真っ白になった。背後の音から逃れることで精一杯で、他の事なんて考えられない。ただ必死に足を前に出し続けた。

突然目の前が開けた。道に出たのだ。この道をまっすぐ行けば誰かに会って助けて貰えるかもしれない。けれど私の体が悲鳴をあげていた。全身は石のように重く、胸は踏み潰されたように苦しい。視界はだんだんと色味を失っていく。ダメ、もう走れない……。

不意に足元がぐらついてそのまま転んだ。

体を回転させて仰向けに向き直ると、狼が今まさに私を見据えて飛びかかろうとしているところだった。

その時、左側から黒い影が視界に入った。

「えっ？」

黒い影だと思ったのは男の人だった。その人は私に飛びかかってくる狼を右足で思いきり蹴飛ばした。

狼はそのまま振っとなで地面に叩きつけられると、悔しそうにこっちを見たあ

とで逃げ出した。

「大丈夫か？」

その人が私に手を差しのべてきた。ほとんど黒に近い青色の長髪と、漆黒のマント。服も黒っぽい色をしていて、まさに全身黒づくめな人だった。声も低かった。まるでおなかの底から出ているような声が私の耳の中を震えさせる。

無表情なその顔からは、何を考えてるのか分からない。

おとーさんしか知らないから年は分からないけれど、おとーさんより若そうだった。

「この辺りは野犬が多いから気を付けろよ」

「野犬……」

いままで狼だと思っていたのは犬だったようだ。私は少し気恥ずかしくなって、目を合わせられないまま差し出された手につかまって立ち上がった。

「どうしてこんな森のなかを歩いてるか知らないが、はやく街に帰った方がいい。野犬相手に逃げ惑ってるようじゃ死ぬぞ」

そういうとその人は背中を向けて歩き出した。

「あっ」

まだ助けてもらったお礼を言ってなかった。

「あの、ありがとうございます」

お礼を言って頭を下げる。足音が止まったので頭をあげると、その人は上半身だけ振り替えて私の事を見ていた。

心臓がキュッと縮んだような感じがした。思えばおとーさん以外の人を見るのも初めてなのに、その人と話をしている。

どうしよう。ありがとうございますを伝えたのはいいけど、その後何を話せばいいか分からないわ。

私が黙ってるのを見かねたのか、黒づくめの方は自分から口を開いた。

「俺の名はアヴェンだ、お前は？」

「あっ、あの。私はカレン・コクマーです」

「カレン？」

アヴェンと名乗ったその人は一瞬驚いたような表情をして、少しだけ表情が緩くなった。

「久しぶりだな、どうしてた？」

「ええと……」

確か久しぶりって以前会った人と再開したときに使う言葉だったよね？

でもそうするとおかしい。私は生まれてからずっと山で暮らしてたからだ。

「あの、人違いではないでしょうか……？ 私は生まれてからずっと山で暮らしてたので」

アヴェンさんはもう一度驚いたような表情をした後、今度は最初と同じ無表情に戻ってしまった。

「そうか。すまなかったな、俺の勘違いだ」

「すみません」

「ま、ここで会ったのも何かの縁だ。お前さえよければシェダルまで案内するぞ」

「シェダル……」

おとーさんから聞いた街の名前だ。怖そうな人だけど、アヴェンさんについていけばシェダルまで行ける。野犬に襲われてもまた守ってくれるかもしれない。

「あ、あの。……お願いします」

私はもう一度頭を下げた。

アヴェンさんと一緒に歩くことおよそ三十分。森を抜けて、平原の遠くに街の姿が見えた。

「わぁ、大きい。あれが街なんですね」

「そうだ。あれが安息の街シェダルだ」

シェダルは遠くから見ているはずなのにとても大きく見えた。高い建物の周りを高い壁が取り囲み、一ヶ所開いている門のような所をありんこのような大きさの人や馬車がひっきりなしに通っている。

心がうきうきとして、あの門をくぐったらどんな景色が広がってるのか早く見たくなった。

「早くいきましょよ、アヴェンさん！」

人と話すとき、どんな話をすればいいのかまだ分からないけど、アヴェンさんの話を聞いたり質問に答えてるうちに、だんだんとお互いの事がわかるようになってきた。

アヴェンさんは私よりひとつ年上だった。ディスパテルなのに魔術をほとんど使わず、背中に背負ってる大きな剣で魔物と戦うと聞いた。

そして、アヴェンさんは無表情だけどいい人だった。まだ緊張してうまくしゃべれない私の話を真剣に聞いてくれた。そのお陰でだんだん話しやすくなって打ち解けることができたのだ。

アヴェンさんもシェダルに向かうところだったそうだ。シェダルから少し離れた村にアヴェンさんの家があって、ペルディータという名前のボルグで傭兵として働くために街に向かっているところだそうだ。

ボルグというのは正式名をアスモディアボルグといい、民間で立ち上げられた傭兵稼業をしている組織だ。

傭兵とは言っても街の便利屋さんみたいな感じで、街に住む人々のために働く

組織のことだ。

今歩いてる道は途中でいくつかの道と合流し、徐々に広がっていく道幅に比例するように人の数も増えていった。

けれど、それに反比例するように私は元気を無くしていった。

「おい、大丈夫か？」

「……」

今まで私以外の人はおとーさんだけだった。アヴェンさんも一人だったからなんとなく大丈夫だった。

だけど、徐々に増えていく人の中に入り込むのは怖い。人の中に飲み込まれて押し潰されそうな感じがするのだ。

アヴェンさんの背中にくっついて道を進んでいく。

「しっかりしろ、そんなんじゃ街に入れないぞ」

アヴェンさんが肩に手を置いて言った。

そうよね、こんなところで挫けてちゃ憧れの街で暮らすことができないわ。

「が、頑張ります」

はっきり言ったつもりが、蚊の鳴くような声になってしまった。

街の門をくぐるともっと多くの人がいた。さっきまでの元気はすっかりどこかに無くなってしまった。心臓がさっきから強く鳴りっぱなしで、息が苦しい。

「すみません、少し休ませてください」

道の端っこに寄ってしゃがみこむ。大通りは大勢の人が行き来していて、人通りがやむ気配はない。

「本当に人が苦手なんだな」

アヴェンさんの背中越しにため息混じりの声が聞こえる。情けないな、私。

「目的地はどこなんだ？ 叔父のゼキルさんとやらを訪ねるんだったな」

「えっと。ここ、です」

ポケットから地図を取り出して赤い丸を指差す。目的地は今いる門からそれほど離れていないことが唯一の救いだった。

ただ、早く目的地に着くのは良いけれど、アヴェンさんとは離ればなれになってしまう。その事がとても心細いのもあった。

「なんだ。お前の目的地もペルディータじゃないか」

「えっ、そうなんですか？」

立ち上がって地図をのぞき込むと、アヴェンさんは地図の赤い丸の中に書いてある文字を指差した。

「アスモディアボルグ・ペルディータ……よかった」

アヴェンさんに指差された文字を読んで、体の力が抜けてしまった。

「行き先を知らなかったのか？」

「えっと、それは……民家だと思って文字を読まなかったんです」
民家だと思って地図の赤い丸だけ確認して中の文字は気にも留めていなかった。
「そうか。そうと決まれば早いところ行ってしまおう」
そうやってアヴェンさんはこの辺りで一際屋根の高い建物を指差した。

街の門から歩くこと数分。ボルグ「ペルディータ」にたどり着いた。
この辺りで一番大きな建物で、全部で五階くらいはありそうだ。その大きな門の前に二人立っていた。
大通りに面しているこの建物は特に人の出入りが多く、果たしてこの中に入っ
て無事に出てこれるのだろうか……。

「わあ、大きいですね」
「シェダルは大きな街だからな、そんな街を守るためにはたくさんの人が必要
なんだろうな」
「そう、シェダルはこのペルセウス王国の中でもっとも栄えている都市だ。全
ての物はシェダルに集まり、首都へと流れていく。首都からの物はシェダルを
通り国内にあまねく広められる。そんな街を守るのが我々ペルディータの仕事
だ」

突然背後から聞こえた声に振り返ると、長身の男の人が立っていた。アヴェン
さんよりも身長が高いその人は、私と色が似ている銀色の髪だ。青紫色の瞳は
とても優しく私たちのことを見ている。
初めて会う人のはずなのに、なぜか懐かしいような感じがする。

「えっと、あなたがゼキルさんですか？」
「その通り。シェダルへようこそ、カレンちゃん」
意を決して問いかけると、ゼキルさんは笑顔で答えてくれた。よかった、優し
そうな人で。

ゼキルさんは次にアヴェンさんに向き直った。
「君がカレンちゃんをここまで連れてきてくれたんだね」
「はい。アヴェン・タルシスと申します」
「アヴェン……。よしアヴェン、一緒に中へ入ってくれ」
そう言うと、門の中に案内された。

「アスモディアボルグとは魔族の城塞という意味で、地域保護結界が今よりも
もっと弱かった時代、魔物や侵入者から街を守るために結成された自警団が由
来となっている」
石でできた建物の中はたくさんの窓があり、明かりを灯さなくても明るかった。
ボルグの説明をするゼキルさんの後に続いて、階段を上っていく。

「魔方陣の技術が進歩し強固な結界を敷くことができるようになった今は、街の治安維持や街から街へ移動するときの護衛、近隣の魔物の討伐や薬草の採集など幅広い活動を行っている」

階段を上る私たちの横を帯刀した人が四人駆け降りていく。通りすぎるときゼキルさんに一礼をした。

「まあ、民間とはいえ我々は一人一人が王都から騎士として任命され、有事の際には街の防衛を義務付けられているなど、その立ち位置は職業軍人に近い」
最上階にたどり着いた。ゼキルさんが正面の木の扉を開けると、中はおとーさんの書斎のような部屋が広がっていた。

「改めて挨拶をしよう。私はゼキル・アトラシア、このペルディータの長をしているとともに、カレンちゃんの叔父だ」

「カレン、お前ボルグの長の姪っ子だったのか」

「わ、私も初めて知りました」

「カレンちゃん。話はハウレス、君のお父さんから聞いているよ。今日からよろしく」

「はい、よろしくお願いします」

私はお辞儀をしてゼキルさんが差し出した右手を握り返した。

「そしてアヴェン。カレンちゃんをここまで連れてきてくれたことを感謝するよ」

「身にあまるお言葉です。カレンとは道端で会って行き先が同じだったので案内したまでです」

「行き先が同じ、というと？」

「俺はペルディータで働きたくてここまで来ました」

「おお、ここに志願してくれるのか。アヴェン、喜んでペルディータの一員として迎えよう」

「ありがとうございます」

アヴェンさんは深々と頭を下げた。ゼキルさんは自分の机から木でできた小さな箱を二つ取り出して机の上に置いた。

「本当ならカレンちゃんに付きっきりで世話を焼いてあげたいところなんだけど、あいにくこんな身の上でね。カレンちゃんにもここでペルディータの一員として働いてもらいたいと思っている。ああ嘆かわしい」

ゼキルさんはそう言うと残念そうな顔をしながら右手で顔を覆った。大げさな身ぶりについ笑いがこぼれてしまう。

「そこでだ、もし二人さえよければ、二人でチームを組んでもらいたい。一つのチームとして成り立つための定員四人が揃うまでは雑用が多くなってしまっだろうが、アヴェンと一緒にいてくれるのなら私も安心だ」

「俺はそれでも良いですよ」

全く知らない人と組むのはまだ怖い。それだったらアヴェンさんと一緒の方がよかった。

「私もアヴェンさんと一緒の方がいいです」

「決まりだな。では二人に徽章を与える」

ゼキルさんはさっき置いた木の箱を一個ずつ私たちに手渡した。

「開けてごらん」

ゼキルさんに言われた通り箱を開けると、中には銀色のバッジが入っていた。五角形の形で、花の装飾が施されている。

「五角形の徽章は国内ではアスモディアボルグだけに使用が認められている。人々が一目見てボルグの一員だと分かるようにだ。ペルディータはそこにキキョウの花をあしらっている。正義と誠実の名のもとに活躍を期待しているよ」

「はい、ありがとうございます」

アヴェンさんが左の襟にバッジを取り付けた。私もそれにならってバッジをつける。

「よし、それでは手始めにお前達的能力を測るから、順番にプリムラコードを読み上げてくれ」

「プリムラコード？」

「なんだカレン、プリムラコードもしらないのか？」

初めて聞く言葉だった。いったいどんな意味なのかは分からないけど、アヴェンさんの驚いた表情を見た感じ、常識のようなものなのかもしれない。

「まあまあ、カレンちゃんはずっと山で暮らしてたんだから……ハウレスの奴め、何を教えてきたんだ」

ゼキルさんは目をそらしてボソリとおと一さんに対して悪態をついた後、詳しい説明をしてくれた。

「プリムラコードというのは人の持つ魔力を測定するために作られたコード……つまり詠唱文だ。このコードは供給と生成と放出、それぞれの魔術制御を行うためのごく原始的な文体で、これ自体は魔術としては息を吸って吐くくらいのもので派手な効果はない。このコードは後ろに行けば行くほど同時に裁く魔力量が増えていくから、これをどこまで読むことができるかでその人の魔力器の容量、魔術回路の規模、放出系単語等を高い精度で測る事ができるんだ」

「あのコードはそんな仕組みだったのか」

「まあ、言語学を学ぶ者以外は原理を知らなくてもいい代物だしな」

ゼキルさんは一枚の紙を取りだすと、その上にペンで三つの枠を書いた。

その紙に文字を書き出しながら説明を続ける。

「ディスパテルは学校に入ったり職業に就く時にこのプリムラコードを読み上

げて、上級と中級と下級三つの魔族階級に分類される。上級魔族には高い魔力が備わっているが、その分体が弱いから仕事の幅が狭くなってしまふ。逆に下級魔族は魔力こそ少ないが体が丈夫だから様々な仕事を選ぶことができる。そんな彼らを守り、最適な道を見つける手助けをするのがこのプリムラコードの使命だ。大勢にとっては通過儀礼の決まり文句のようなものだが、その中身は巧妙に考えられて作られているのさ。花言葉とかけて運命を開く詠唱文、その名もプリムラコード。なかなかのネーミングじゃないか」

そう言う、ゼキルさんは背後の棚から一枚の紙を取り出した。表面には魔術言語がびっしりと書かれている。これがプリムラコードのようだ。

「苦しくなったらすぐにやめるんだ。良い結果を出すための試験じゃないし、無理をすればすぐに分かるからな」

そう言う、ゼキルさんはその紙をアヴェンさんに手渡した。

「じゃあまずアヴェン、カレンちゃんに手本を見せてやってくれ」

「分かりました」

アヴェンさんは紙を受けとると、すぐに詠唱を始めた。読み始めると同時に体が淡い青色の光に包まれていく。けれど二つ目のコードに入るとすぐに光の色が黄色と青を交互に繰り返す、三つ目のコードが始まってところであっという間に赤くなって消えてしまった。

これで十分だという顔をしながら紙から目を離すアヴェンさんに、不思議そうな顔をしたゼキルさんが言った。

「うーん、能力や適正は悪くないんだが。さては魔術を使い慣れていないな？ 訓練を積めば中級魔族くらいにはなれると思うが？」

「いや、俺は下級で良いです」

そう言うアヴェンさんは私に紙を渡してきた。

「お前の番だ」

「あっ、ありがとう」

アヴェンさんから紙を受け取り、紙に書いてある文字を見渡す。

……思い出した。おと一さんと言語学の勉強をしたときにこの文章を使った気がする。

大体はゼキルさんが説明したとおりだけど、目で見ても分かりやすいように、変換と放出には体のまわりに色つきの光をまとうように書かれている。けれど大部分の魔力はその多くが無意味な変換をしたのち放出される。

あのときはどういうものに使うのかわからなかったけど、こういうときに使うものだったのか。

「カレン、どうした？」

「あっ、ごめんなさい」

慌てて紙の文章を読み始める。何度も勉強に使った文章を唱えるのは初めてだった。読み上げると同時に体のまわりを暖かい空気が包み込むような感じがした。

アヴェンさんが読み終えた場所を越え、六つ目のコードを読んでいる途中、突然せき止められたかのように体の中を流れる魔力の感覚が止まった。

文章はそのまま読み進められるのに、魔力が伴わない。体の表面を覆っていた暖かい感覚も消え果てて、私は読むのをやめた。

「あれ、どうして？」

苦しくも何ともなかった。その気になればずっと先まで読むことができそうなのに。

「……魔力抑制だな」

腕を組んで私の詠唱を見ていたゼキルさんが言った。

「魔力抑制？」

「一定以上の規模の魔力が体の中を流れないようにしてる。ハウレスの仕業だな」

おと一さんが私に魔力抑制をかけたんだだろうか。でもおと一さんが私に魔術をかけたことなんて一度もなかったと思うけど……。

「おそらく魔力を無効化する装飾具のようなものがあると思う……。なにかハウレスから肌身離さず持っているように言われてるものはないか？」

「おと一さんからもらった……。あっ」

私が十二才の誕生日にもらったペンダントがあった。私を守ってくれるお守りだからずっと身に付けていなさいと言われてたからそうしてるけど、今日は野犬に追われたり人の波に飲まれたりでさんざんな一日だった。

ご利益の全く無いペンダントを取り出して見せると、ゼキルさんは驚いた顔をして言った。

「それはシャルテの……。そうか、あいつめ」

「えっ、シャルテさんって？」

ゼキルさんの口から知らない人の名前が出てきた。私が聞き返すと、ゼキルさんは少しだけ悲しそうな顔をした。

「いや、何でもない。それを外してもう一度プリムラコードを読んでみてくれ」ペンダントをゼキルさんに預けて、もう一度詠唱文を読み始めた。

暖かい光が私を包み込んでいく感覚。

取り込んだ魔力は体の中をめぐり、様々なものに形を変えた後、私の両手から大気へと還っていく。

徐々に私の中を流れる魔力の量が増える。でも苦しくはなかった。魔力が体に染み込んでいくような感覚だった。暖かくて心地よい空気に包まれて心が落ち

着いている。

「これは……」

「すごいな、さすがカレンちゃんだ」

とうとうコードを最後まで読みきってしまった。体の周りを包んでいた光は小さな粒子となって、水が蒸発するようにゆっくりと大気中に溶けて消えた。

「見事だカレンちゃん、苦しくなかったか」

「あ、いえ。平気でした」

もっと続きが読みたかった。このコードを読むと本当に苦しくなるのだろうか。

「カレン、おまえすごい奴だったんだな、プリムラコードを最後まで読める奴はほとんどいないぞ」

アヴェンさんが驚いた顔で言った。今まで表情がほとんど変わらなかったアヴェンさんの表情が緩んで、興奮してるようだった。

「確かに、たくさんの方がコードを読むところを見てきたが、最後まで読みきったのを見たのはカレンちゃんの他に数人いたくらいだ」

ゼキルさんもにっこり笑って言った。

「でもどうしておとーさんは魔力抑制のペンダントを私に？」

「……それについては俺もハウレスには同意見だ。魔術の使いすぎは体に大きな負担がかかるからな。このペンダントは肌身離さず持っていた方がいい。抑制をかけても並の魔術師よりも全然能力はあるからな」

魔力は元々人の体には有害だ。ディスパテルの魔術の原型は、体に入り込んでくる魔力を体の外へ追い出すための能力だ。

それがいつからか体内で形質を変えられるようになって、魔術を使うために自ら魔力を取り込むようになったのが今の魔術。そのお陰でディスパテルは体が弱くなり、平均寿命がミネルヴァより **20** 年も短くなった。

「さて」

ゼキルさんがプリムラコードの書かれた紙を棚の中にしまった。

「お前たちの事は大体分かった。残りの二人については追々何とかするとして、まずはこの街での生活に慣れてほしい。カレンちゃんには部屋を用意してあるから、行って荷物を下ろしてくるといい、後で昼食に行こう」

ゼキルさんが机の引き出しから部屋の鍵と地図を出した。

「裏口から出て正面にある建物の最上階、四階の一号室だ」

「はい」

「それからアヴェン、ちょっと話があるから少し残ってくれ」

「わかりました」

部屋の隅に置いた荷物を持ち上げようとした私の手が止まる。アヴェンさんが残るってことは、一人で向かいの建物まで行かないといけない。

アヴェンさんを振り返ると、すでにこっちを見ていたアヴェンさんと目が合った。

「カレンもこの街で暮らすなら、早かれ遅かれ人に慣れないといけないだろう。まずは練習だと思って頑張ってくれ」

アヴェンさんはそう言うと私の頭に手をのせた。

「後で迎えに行くから先に一息ついていろ」

アヴェンさんに促されるまま扉の外に出ると、背後でドアがパタンと音を立てて閉まった。

辺りに人はいないけど、階段を降りたら人がいるかもしれない。わらわら集まって私を押し潰すかも。

そんなことを考えると足がすくんで動けなくなりそうだ。でもアヴェンさんの言うとおりのこの街にも慣れないといけない。

「頑張れカレン、進むのよ」

私は鞆をギュッと握りしめると、深呼吸して覚悟を決めた。

途中にいる人たちを木や草に見立ててその合間をすり抜けていく。

動いてるのは風が吹いてるせいだ。話し声も風で枝葉が揺れてる音だ。建物の中だけだとすごく強い風が吹いてるんだ！ そうよ、なんにも聞こえないしなにも知らない！

ずんずんと歩みを進め、地図通り裏口を出て石畳の道を通って正面の建物の中に入る。

建物に入ってすぐに階段を上る。途中で人とすれ違っても気にしない。

四階にたどり着いて鍵を開け、部屋に入ってすぐに扉を閉じる。その途端全身の力が抜けてその場に座り込んでしまった。

「なんだ、できるじゃない」

その言葉とは裏腹に手足は震えるし、涙まで出てきた。

今日は大変な一日だった。野犬に追われて人の波に飲まれて……。アヴェンさんもゼキルさんはいい人だ。でもこの街で暮らしていくことができるのだろうか。

「おとーさん……」

上ずった声でおとーさんの名前を呼び、手で涙を拭う。

こんな思いをするくらいなら、街になんて行きたいと思わなかったわ……。

扉の前で座り込んだまま涙をぬぐうと、屋内なのに部屋が明るい事に気がついた。でも蠟燭や暖炉の明かりじゃない。日の光が部屋の中まで入り込んでいるようだった。

ゆっくり部屋の奥に歩いてはっと息を飲む。目の前には大きな窓ガラスがあった。そして窓ガラスを通して街の景色が一面に広がっていたのだ。

オレンジ色の屋根が絨毯のように続き、白い鳥達が空を軽やかに舞う。鐘を打つ音が町中に響き渡っていた。

「きれい……」

今まで木々の色しか見てこなかった私にとって、鮮やかな街並みはとても新鮮だった。

人が多くて怖いけど、目の前に広がる景色はずっと憧れていた街なんだ。

しばらく見とれていると、扉をノックする音が聞こえた。

「カレン、昼食に行くぞ」

「はい！」

返事をして扉に向かう。これからの生活に少しだけ希望が持てそうだ。

期待いっぱい扉を開けた瞬間に表情が凍りついた。アヴェンさんとゼキルさんの他に、知らない人が三人も一緒にいたのだ。

……まずは人に慣れないとね。まだまだ先は長そうだ。